夫の巌本善治は、明治女学校の経営者であり、女学雑誌の責任者でもあり、また、そのころの女子教育の中心者でもありました。来客もたくさんあります。それらの人々と応対するのも、妻の賤子のたいせつな仕事の一つでした。

賤子のからだを心配したある人が見かねて、

「靴を玄関からかくして、留守だといって、お客さんを少しことわったらどうですか。」

というと、賤子は、

「私はそんなウソをいうことはきらいです。」

と、はげしく言って、顔色がさっと変わるほど、ウソのつけない、自分にきびしい性格でした。

教え子や後輩から、尊敬とあこがれのまとであった賤子ですが、会津の子供たちの教えの中心である『ならぬことはならぬ』というはげしさをもっていた